

---

# 【VOCALOID】ルカ、おっばい揉んで

ピーナッツ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【VOCALOID】ルカ、おっぱい揉んで

### 【コード】

N5084BA

### 【作者名】

ピーナッツ

### 【あらすじ】

VOCALOIDの二次小説です。

おおむねタイトル通りの内容です。

ミク、ルカ、リン、レンの四人はクリプトンから与えられた立派なマンションに住んでいる。

リビングの隣には防音のレッスンルームがあり、音響機器が一通り揃っているばかりでなく、結構な広さがあってダンスのレッスンもできるようになっていた。

今日はミクとルカが新曲の振り付けを練習している。

「ねえ、ルカ、腰の振り方教えてくれない」

ルカが絡む曲は大人っぽい楽曲が多く、振り付けも相応に艶やかだ。

「こつよ、 を描くように…」

ルカが手本を示す。

「こ、こつ?」

「それじゃ が寝てるでしょ。そうじゃなくて、縦に よ」

フラダンサーのような見事な腰の振りを見せるルカ。

「上手いわねえ、ルカ。真似できない…」

ミクがちよっぴり悔しそうな顔をする。

「しょうがないわよ。あなたとわたしじゃ仕様が違うから。その差

だと思っよ」

ミクはどんな複雑な振り付けでも一発で覚える。

腰の振りが真似出来ないのは、ルカの言う通り仕様のせいだろう。

「あたし、ルカみたいに、もっと色っぽさも身に付けたいの」

歌と踊りに関しては誰よりも真面目なミクが、切実な声で言った。

「もっかいやるね。どう、ルカ、さっきよりいいんじゃない?」

懸命に腰を振る彼女を、ルカは顎に手を当て難しい顔で見ている。

「ちよつと良くなったけど…うーん、あなたがいくら腰振っても、胸がないからねえ。あっ…ああ! ごめん! ミク! orzにならないで!」

へナへナと床に崩れ四つん這いになったミクに、ルカが慌てて謝る。

「ルカ…それを言っちゃあおしまいよ…」

「ああ、寅さんになっちゃった。ごめんなさい、つい口が滑って」

「口が滑ったって、じゃあそう思ってんじゃない! 人が一番気にしてることをサラッと…」

ルカの手を借りてよろよろと立ち上がる。

「何かやる気なくなっちゃった…ルカ、もう一回だけ振りを合わせたら、終わりにしましょ…」

気を取り直して曲を流す。

二人が踊っている、リンがレッスンルームに入ってきた。

真面目な顔で姉二人のダンスを眺める。

曲が終わるとボソツと感想を言った。

「息ピッタリね。でも、ルカ姉と一緒に踊っていると、ミク姉に色気がないのが如実に分かるわね。…ああっ！ ごめん！ ミク姉！ Orzにならないで！」

再びフラフラと倒れるミク。ルカが右手で顔を覆う。

「せっかく立ち直ったとこだったのに…」

駆け寄ったリンが、ミクを抱き起こす。

「ミク姉、気にすることないのよ。ほら、ダンスの上手さは同じくらいなんだから。ミク姉胸がないから、色気がないように見えるだけで…」

起き上がりかけていたミクがリンの手をすり抜け、床にのびてしまう。

「リン！ フォローの仕方が逆よ！」

「え？ 気にしてるのは胸の方？ あたしてつきりもうあきらめてるものだと…」

リンは一生懸命肩を揺すって起こそうとしたが、ミクは拗ねてしまつて、突っ伏したまま動かなかった。

落ち込んだミクは自室にこもってしまった。

ドアの前で困り顔のルカとリン。

「ルカ姉、ごめん」

「謝らなくてもいいわよ。わたしも胸がないって言ったし」

「すごい落ち込んでたね」

「大丈夫。夕飯にネギ料理作って、うちわでドアの隙間から匂いを送ってやれば出てくるわよ。そこを捕まえて引きずり出すから」

「マテ貝みたいね」

ルカは思わず吹き出した。

この時はまだ、後で笑い事ではない事態になるとはルカには予想すべくもなかった。

夕食前にリンとレンは、Pさんに呼ばれてPVの撮影に行った。

ルカが部屋のベッドに寝転んで本を読んでいると、ノックもせずミクが入ってきた。

「ルカ、おっぱい揉んで」

ルカが身を起こす。ミクはタンクトップに下はジャージと軽装だ。

ツインテールもほどいてストレートにしている。

「藪から棒ってあなたのためにある言葉ね。何なのよ？」

「おっぱいは揉むと大きくなるのよ。早い方がいいんだって。人に揉んでもらうと効果倍増なの」

「今さらそんな古い迷信を…」

手に持っていたインターネットを印刷したらしき紙を示す。

「ちゃんと論文もあるのよ。ブラジルのアントニオ教授が報告してるの」

受け取って斜めに目を通す。案の定うさんくさい。

「1962年…キューバ危機があった年の論文ね」

「分かったでしょ。早いうちがいいんだから、早速はじめるわよ。これから朝昼晩やるから、協力してちょうだい」

「まったくあなたは、この前はキスしてって言って、今度は乳揉めって…努力する方向間違ってるんじゃないの？」

ミクがふくれる。

「何よ、自分は大きいからって。ルカにはあたしの悩みなんて分からないんだわ」

面倒くさいなあ。でも事の発端はわたしだし。

しゃーない、これで機嫌が直るんなら、ちょっとだけ付き合っ  
てあげよう。

「分かった。揉むわよ」

「ありがとう。じゃ、お願いね」

ミクがベッドに腰を下ろす。

「ここじゃダメ。レッスンルームに行きましょう」

「何で？ いいよ、ここで」

ルカはミクの肩に手を置いた。

「あのね、おっぱい揉んでて、万が一変な気になっちゃった時に、  
場所がベッドの上じゃ便利すぎるでしょ」

真剣な顔でミクを見つめる。

ミクはゴクツとツバを飲み込んだ。

「そ、そうね。レッスンルーム行こ」

レッスンルーム。

ミクが背もたれのない丸イスを二つ並べる。

「後ろからの方がいいわね。ミク、向こうむいて座って。ブラして  
ないよね？」

「うん」

縦に並んで座ると、目の前にミクの青緑色の髪が広がる。

…髪、邪魔ね。くっ付かないと手が届かないな。

足を広げ、丸イスをそばに寄せる。

顔が髪に埋もれて、息ができなくなってしいそうだ。

ルカは少し身体を斜めにして、顎をミクの左肩に乗せるような格好にした。頬が触れ合いそうだ。

近いわね…まったく、この前キスしたときみたいに変な気になんなきゃいいけど。

ルカの心配をよそに、ミクは医師の診察を受けるようにシャンと背を伸ばして座っている。

おし、やるか。

ルカが腹の方からミクのタンクトップに手を入れた。

とたんにミクが、加速装置でも付いているのかと思うスピードでイスから跳ね上がった。

「ル、ルカ！ 生じゃないわよ！」

「へ？ ああ、服の上からなの？ そうならそうと最初に…」

「生なら脱ぐわよ！ あー、ビックリした…」

ミクがイスに座り直す。

「ごめんごめん。じゃあ、仕切りなおしね」

後ろから抱きつくようにして、ミクの胸に手を回す。

なるべく乳首は刺激しないようにしたいのだが、胸が小さすぎて乳首を避けると変な揉み方になってしまう。

仕方ないので、掌をお椀形にしておっぱい全体を包むように被せる。

「いくよ」

「いつでもどうぞ」

掌全体を使って、やわやわと胸を揉む。

(へえ、小っちゃいけど、触り心地はいいじゃない)

「こんな感じでいい?」

「いい...よ...」

いいよと言いつつ、ミクの体がだんだんと前屈みになっていく。

アレ? と思いながら、ルカも身体を倒して手から胸が逃げないようにする。

「.....ってルカ!!」

ミクが立ち上がり、胸を押さえる。

「変な触り方しないでよ!! あたし真面目にやってるんだから!

!」

ルカはロボットののように両手を前に出して止まっている。

「何よ？ 変な触り方って？」

「い、いやらしいのよ！！ 手つきが！」

はあ？ とルカは釈然としない顔をした。

「普通に触ってるだけだけど。乳首もあんまり刺激しないようにしてるし」

「ほ、本当？」

疑わしげな目を向けつつ、ミクがまたイスに座る。首を後ろに向け、ルカに釘を刺す。

「いい、婦人科医が乳癌検診するみたいに、一切余計なことしないで、事務的に揉むのよ。分かった？」

はいはい、と適当に返事を返し、また胸を揉む。

ミクは最初スツと背筋を伸ばして座っていたが、すぐに身をよじりだした。

時折なまめかしい吐息が漏れる

「……………ス、ストップ！ ストップ！！」

ルカの手を振り切るようにしてイスから立ち上がる。

「や、やっぱりふざけてるでしょ！ ルカ！」

ルカが溜息をつく。

「ミク、あのね。わたしは仰せのとおり、マッサージ機になったつもりでただただ手を動かしてるだけでございますよ」

ミクはタンクトップの上から手で胸を覆い隠し、ルカを睨んでいる。風呂を覗かれたしずかちゃんみたいだ。

「ウソ！ 絶対あたしのことからかってる！」

「いやらしいって、どんな感じなわけ？」

「……」

ミクが言葉に詰まる。

なるほど、口では言えないような感じなのね。

「ミク、あなた感じやすいんじゃないの？」

何気に言った一言で、ミクの顔がボツと火のついたように赤くなっ

た。  
「お、乙女になんてこというのよ！！」

「だってそうじゃない。エステでも胸触るのよ。普通こんな触り方したくらいで感じないわよ」

「……」

「うそだと思っんなら、わたしの胸揉んでみてよ」

ルカはTシャツの背をめくってブラのホックを外し、袖から肩ヒモを引き抜いて、服を着たままブラを外した。  
髪と同じピンク色のブラを、傍らのテーブルに放る。  
ミクがそれを猫のような顔で見ている。

「…ルカ、何かッブだっけ？」

「D」

「でい、でい…」

愕然としているミクには構わず、背を向けて丸イスに座る。

「さ、どうぞ、揉んでちょうだい」

ミクが後ろに座り、おそるおそる胸に手を伸ばす。  
少し躊躇ってから胸に手を当て、ひとつ深呼吸する。  
覚悟を決めると、むに、とひと揉みした。

ルカは「お、来たな」と思ったが、すぐにミクの手は離れ、後ろでガタンと音がした。  
振り向くとイスが倒れミクが床で寝転んでいる。

「何遊んでるの？」

「…お、大きい…」

「いまさら。あなたお風呂で見たことあるでしょ、わたしのおっぱい」

「…じ、直に触ると、量感が…」

ミクはダウンしたボクサーみたいによるめきつつ起き上がり、イスを立てて座り直した。

丸イスに座る姿はあしたのジョーのようだった。

「凹んでないで、揉むなら揉んでよ、早く」

「へいへい」

目尻に浮かんだ涙を拭い、悔しさをこらえてミクは胸を揉んだ。

うわあ、でか。メロン二個分だわ、こりゃ。

こんだけ大きくても張りがあって上向いてるし。

同じボカロで何でこんなに違うのよ。

今度KEEに会ったらひっぱたいてやんなくちゃ。

「ほら、どう？ わたしは平気ですよ」

うーん、確かに。

「ミクが感度良すぎるのよ。あんな、ちょ、ちょっと…む、胸…揉んだ、く、くらい…で…」

アレ？ アレレ？ 何だか、ルカの身体がクネクネしてきた。

くすぐったさに耐えるように、ルカが身をよじる。

と思うと、ミクと同じように前屈みになってきた。

ミクはなおも胸を揉み続ける。

「……………ミク、ストップ……………お願い…やめてっ!」

ミクが手を離すとルカは胸を押さえてうずくまった。少し息が荒い。

「こ…、こんなはず…ないのに…」

「ルカもいつしよじゃん。気持ちよかった？」

「バカ」

ルカは赤い顔をして言った。

「でも、おかしいわね。わたしがこんなに感じるはずは…メモリーのデータと違うし…わたしの推測では、可能性は二つ…」

「どづいつこと？」

「ボーカロイド同士の間働く、特別な力のためか…」

「もう一つは？」

「クリプトンに変態がいて、わたし達の身体をそういう仕様に作ったか…」

「前者！ 前者でお願いします！！」

青い顔をしてミクが懇願する。ルカに言ってもしょうがないのだが。

「どのみちはつきりしてるのは、ミク、あなたおっぱい揉んでほしかったら、我慢するしかないってことよ」

ミクの肩にグツと力が入る。

「…わ、分かったわ。あたし頑張るから、ルカ、揉んで」

ここであきらめないとこが根性据わってるわよね。

ルカはそう思いつつ再び丸イスに座った。

「…ス、ストップ…ルカ、降参、もうダメ…」

ミクもルカも板張りの床に転がっている。

ルカが胸を揉み始めるなり、ミクは身をくねらせ、イスから転げてしまった。

中途半端が嫌いなルカはミクの胸をつかんだまま一緒に寝そべり、おっぱいを揉み続けた。

はたから見たらレズってるようにしか見えない状況でミクはそれなりに頑張ったのだが、五分ほどで理性が持たなくなり、ギブアップした。

「そ、そうね…もう止めときましょ。あなたのあえぎ声聞いてたら、わたしまで変な気になっちゃいそう…」

ルカも頬が上気している。

「ルカ…あえぎ声とか言わないでよ…恥ずかしくて死にたくなっちゃう…」

「そっ？可愛かったわよ」

「もう！ やめてったら」

ミクがずれ落ちたタンクトップの肩ひもを直す。

「はあ、でもどうしよ。おっぱいモミモミ作戦がダメなら、いつそ高須クリニックに…」

その時、携帯電話の着信音が鳴った。ミクのだ。

「もう！ 誰よ、こんな時に！」

テーブルの上に置いてあった携帯を取る。

「きゃっ！ セロ様！」

セロ様とは、スーパーセロPのことである。

ミクの楽曲を中心にミリオンヒットを多数生み出している敏腕Pだ。作曲業の傍らマジシャンとしても活躍し、「サプライズ」という流行語を産んだ。

才能がある上に温和な人柄で、ミクはそんなセロに憧れている。深呼吸して気持ちを落ち着け、通話ボタンを押す。

「はい、お待たせしましたあ。ミクでえす」

あまりのぶりっ子声に、ルカがあんぐりと口を開いた。

「今からですね？ はい、大丈夫でえす。ルカとダンスのレッスンしてたところ…」

「おっぱい揉まれてあえいでしたって言いなさいよ」

ミクがキツとルカを睨む。

「はあい、それでは、すぐ向かいます。いつも呼んでくださってありがとうございますごさいます」

電話を切る。

「どっから声出してんの？あんだ？」

「ルカ、聞いてたでしょ。セロさんとこ、行ってくるからね」

ルカの突っ込みは軽くスルーする。

ミクはその後三十分かけて着ていく服を選び、セロPのところへ出掛けていった。

「…ミク、ジェンダーとか勝手にパラメータ変えてない？」

スーパーセロPの自宅。

シンセサイザーやミキサーなど音響機器が所狭しと並んだ部屋で、ミクは新曲の調教を受けていた。

いつもより手こずるので首をかしげていたセロだが、どうやら原因に気が付いたようだ。

勝手をしていたのがばれて、ミクは肩をすくめた。

「う、ごめんなさい。ちょっと、大人っぽい方がいいかなと思って

…」

セロは黒い革張りのイスを回してミクに向いた。

「どうしたの？　今までそんなこと気にしなかったのに」

怒るでもなく、不思議そうな顔をしている。

セロPはまだ若いのだが、大人の雰囲気を持っている。

渋みのある顔で優しい言葉をかけられると、ミクなどはクラツとしてしまう。

「あ、あたし、もう十六なのに全然子供っぽいから、もっと色っぽさとか、そういうのもあった方がいいのになって…」

「ルカみたいに？」

ずばり言い当てられ、ミクは言葉が続けられなくなった。

「ルカはルカ、ミクはミク。そうだろ？」

「で、でも…」

「うーん、どう言えば分かってもらえるかな…」

セロPが苦笑いして頭を掻く。そんな姿も様になっている。

「仮にミクが色っぽさを身に付けたとして、それはファンが望んでいることだろうか？」

「それは…男の人は、セクシーな女性が好きなんじゃないですか？」

「それは性の対象として見た場合だよ。君はボーカロイドだ。ファンとプロデューサーが初音ミクに望んでいるのは、等身大の女の子

像じゃないのかな？」

穏やかな声でミクを諭すセロP。

ミクはコーチのアドバイスを受けるアスリートのような顔で話を聞いている。

「例えば君がスタイル抜群で、道を歩けば誰もが振り向くような美女だとする。そんな君が片思いの曲を歌っても、イメージが合うかな」

「…合わないと思います」

セロが頷く。

「いつの時代でも、アイドルは普通の女の子らしさとカリスマ性を同時に身に付けてるものだよ。それはミクの魅力そのものだと思うけど、どう？」

「…あたしの魅力？」

「そう。みんな、素顔の君にみつくみにされてるんだよ。かく言う僕も、その一人だね」

ミクの頬が林檎のように赤くなる。

「セロ様もなんて、そんな…」

「分かってくれたかな？」

「はい！ あたしはあたしそのままがいいんですね！ セロ様、あり

がとつございます…！」

セロも満足げに微笑む。さすが敏腕P、ボーカロイドの調教はお手の物である。

「ミク、手を出してごらん」

「え？ あ、はい」

またマジックを見せてくれるのかな？

前述のとおり、セロはマジシャンとしても活躍している。

ミクは期待でワクワクした。

差し出した腕をセロがそつとつかむ。

いやらしさはないが、ドキッとしてしまう。

どこから取り出したのか、薄いハンカチをふわりとミクの手に被せる。

「自分で取ってごらん」

言われるままに、空いている方の手でハンカチを取り除く。

ミクの手には一輪の花が握られていた。

「わあ、すごい…」

オレンジ色の花弁の、可憐な花だ。

サイネリアだよ、とセロは言った。

「花言葉を知ってるかい？」

「いいえ…」

「いつも元気」

セロはミクの手から花を取ると、髪に挿してあげた。緑色の髪にオレンジ色の花びらが映える。ミクは天に昇るような気持ちになった。

「ペチャパイ〜なんて〜気〜に〜しないわ〜」

翌朝、ボカロ家のキッチン。

ミクが歌いながら朝食の納豆に入れるネギを刻んでいる。すごくぶる機嫌がいい。

「ルカ姉、あれ替え歌だよね？ ピアプロ的にいいの？」レンが聞く。

「あんな古い歌、いいんじゃない？ 問題あれば運営が削除するでしょ」

「それにしてもアホみたいに機嫌いいわね」とリン。

「昨日セロPさんここでいいことあったみたいよ」

「ああ、それで。ミク姉セロP好きだもんね。いいな、あたしも曲作ってほしい」

ネギと卵と醤油を混ぜた四人分の納豆を持って、ミクが食卓につく。

「はい、みくみく菌たっぷり納豆、お待ちどーさま」

さすがに三人ともあきれ顔になる。

「昨日あんだけ凹んでたのに、今日はえらくご機嫌ね。まあ胸は相変わらず凹んでるけど」

ルカの意地悪にも動じない。

「へーんだ、おっぱいなんか小っちゃくてもいいんだもんね」

「セロP貧乳好きなの？」

「ひっぱたくわよルカ！ セロ様はね、あたしはあたしそのままでもいいって言うてくれたの」

頬に手を当て、昨日の幸福を噛みしめるように思い出すミク。

「ああ、何か金子みすず的なことを言ってもらったのね。良かったじゃない、コンプレックスがなくなってる」

「いちいち棘があるわね、あなたの言い方。ボインは悩みがなくていいわね。ねえ、リン、Aカップ同士仲良くしようね」

ミクがリンに微笑む。

「あたしBだよ」

納豆の糸を引きながらリンが言った。

ミクがピタッとフリーズする。

「え？ そうだった？」ルカが聞く。

「一昨日だったかな、前のがきつくなつたから、新しいの買いに行ったの。お店の人にちゃんと測ってもらったら、Bですねって。あ、ミク姉またorzになっちゃった」

イスから滑り落ちたミクが、床で四つん這いになる。

「じゅ、十四歳に負けるなんて…悔しい…」

「考えてみたら、リンはミクより体重あるもんね。そっか、グラム一なんだ」

「大人になったらルカ姉みたいになれるかな？」

「なるなる。わたしよりポインになるかもね」

リンとルカが笑う。ミクはなかなか床から立ち上がることができない。

レンはおっぱいの話には入りづらく、一人黙々と納豆ごはんをかき込んでいた。

リビングの窓辺にはガラスの一輪挿し。

オレンジ色のサイネリアが、朝陽を浴びて輝いている。

おわり



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5084ba/>

---

【VOCALOID】ルカ、おっばい揉んで

2012年1月14日00時54分発行